島根の地域医療

第67号
2019/1/1
発行者　島根県健康福祉部
医療政策課医師確保対策室

SHIMANE AKAHIGE BANK

今回の紙面

◆年頭のごあいさつ《島根県健康福祉部長　吉川　敏彦》
◆地域医療最前線 NO.72《地域医療構想アドバイザー（医療法人同仁会理事長）　櫻井　照久》
◆看護師さんのページ NO.52《島根県看護協会参与・ナースセンター長　春日　順子》
◆研修医のページ NO.55《島根大学医学部附属病院 小児科医　秋好　瑞希》
◆安来市・地域医療を守る交流会　◆平成 30 年度島根県臨床研修指導医講習会
◆医療政策課からのお知らせ

年頭のごあいさつ

島根県健康福祉部長
吉川　敏彦

新年、明けましておめでとうございます。

平成も残りわずかとなりましたが、旧年中は本県の健康福祉行政の推進に当たり、格別のご理解・ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。そして新しい元号の下、新年が地方再生の元年となりますよう、本年も変わりませず、どうぞよろしくお願い申し上げます。

30年間の平成を振り返りますと、特に後半は地域医療にとって激動の時期を迎えました。いろいろありましたが、なんといっても平成16年度の初期臨床研修制度の開始が地域医療提供体制を大きく変えました。「医師は大学から派遣されるもの」「医療機関（病院）はあって当たり前」だったものが、「若手医師が地方に残らない」「地域医療は崩壊するのではないか」と危惧されました。

昨年10月18日に、平成31年度に研修を開始する初期臨床研修医のマッチング結果が発表されました。島根県内の病院とマッチした初期研修医は64名で、マッチ率74％。平成16年度の制度開始以来、いずれも過去最高となりました。内訳をみると、県西部圏域の病院でのマッチ者も過去最高の13名に、また、2年連続で県内8病院の全てでマッチいたしました。県内関係者が一丸となって研修環境の整備や研修の魅力化に努めてきた成果だと思います。無事、医師国家試験に合格していただく必要がありますが、関係者の一人として、本当に嬉しく思います。

全国の医学部定数を人口比で割り戻しますと、島根県は約50名となります。県内で活躍いただく医師が毎年50名誕生しますと、一応全国平均並の医師確保となります。過去の傾向から、県内の初期臨床研修医の8割相当が、引き続き県内で専門（後期）研修に進んでいることから、これまで県内初期臨床研修医の目標を60名超と考え取組みを進めてきました。

さて、2年連続で60名を超え、ようやく一息かと思えば、次に新専門医制度が始まりました。よくよく状況を分析し、地方から声を上げていかなければなりません。

地域医療を取り巻く環境は、ますます厳しさを増しています。少子・高齢化が進展する中で、社会保障費の圧縮要求に加えて「働き方改革」も求められています。入院から在宅へのシフトの動きも避けて通れません。これからの在宅医療・福祉を考えますと、看護職の皆さんに大きな期待をしているところであります。

昨春の医療法・医師法改正では、より一層都道府県の役割が大きくなりました。

全国と比べて15年早く少子・高齢化の進む島根県から、皆様方と一緒に「新島根方式」を提案していきたいと思います。ご協力をよろしくお願いいたします。

地域医療最前線 No.72

地域医療構想アドバイザー
（医療法人同仁会理事長）櫻井　照久

皆様、明けましておめでとうございます。つつがなく、健やかな新年を迎えられたことと心よりお喜び申し上げます。

昨年は6月9日早朝に大田市を中心とした震度5強、6月18日には大阪北部で震度6弱、9月6日には北海道胆振地方で震度7強の地震災害が、また8月5日には台風、梅雨前線による豪雨災害が拡大して、西日本を中心に多数の方がお亡くなりになり、山陰両県でも避難指示が出るなど、多くの方が被災されました。ここ数年、わが国では、大規模自然災害が毎年発災しています。お亡くなりになられた方々にお悔やみを申し上げるとともに、被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

さて、当法人は、昭和43年4月に出雲市大津町に海星病院（精神科、内科）を開設し、続いて昭和52年には、現在の松江市宍道町白石（その当時は八束郡）の宍道湖湖畔に湖南病院（現、こなんホスピタル）を

開設しました。地域の皆様や関係機関の皆様からご支援を賜り、昨年無事に50周年を迎えることができました。改めて、深く感謝申し上げます。平成４年５月に湖南病院に隣接して介護老人施設ケアセンター喜南、平成８年５月に海星病院の精神科療養病棟の増築。平成12年の介護保険制度創設をひかえ、平成11年に湖南病院を改築するとともに同年11月に大原郡木次町（現、雲南市）に介護老人保健施設ケアセンターきすき、平成17年３月にグループホームあい、同年４月に出雲市塩冶町にあさひクリニック（精神科デイケアひだまりを併設）を開設し、平成19年10月には海星病院の全面建て替えをおこないました。

この間、医療法は昭和60年の第一次改正に始まり平成26年第６次改正まで様々な医療計画にかかわる改正が行われてきました。平成26年度は一般診療科を中心に病床機能報告制度の創設、地域医療構想の策定、地域医療構想調整会議の設置、地域医療介護総合確保基金の新設、医療計画の期間を５年から６年に変更など大きな改正が行われました。

また、高齢化の進展、人口減少、さらに団塊の世代がすべて後期高齢者となる、いわゆる２０２５年、さらに２０４０年に向かって、様々な改革が行われています。こうした中、医療・介護の連携が謳われ、一般病院の地域での連携、機能の効率化・重点化、在宅医療の充実、誰もが住み慣れた地域で安心して住み続けられる、地域づくりが求められています。そのための仕組みとして生活圏域での「地域包括ケアシステムの構築」が喫緊の課題となっています。

当県は、東西に長く、離島もあり人口は68万人を切り高齢化率は30％をすでに超える状況の中で、二次医療圏ごとに充実した、住民にとって安心できる医療供給体制の確保が求められています。医療技術の進歩の恩恵を受けながら、限られた医療資源を有効に使い、住民の皆様のニーズにこたえられるように、地域医療に貢献されている皆様の強固な連携とご支援が必要と考えます。大学病院を中心に高度急性期病院の広域的な連携と二次医療圏での病病連携と機能分化、公的サービスと民間サービスが役割を分担しながら介護サービスを包含した慢性期医療・在宅医療の充実が必要と考えます。

経済学者で米子市出身の故宇沢弘文先生は、『「社会的共通資本」としての医療制度を考えると、医療が教育とならんで、もっとも重要な構成要素である。教育は、一人一人の子どもたちが、それぞれもっている先天的、後天的能力、資質をできるだけ育て、個性ゆたかな一人の人間として成長することを助けようとするものである。他方、医療は、病気や怪我によって、正常な機能を果たすことができなくなった人々に対し、医学的知見に基づいて、診療を行うものである。いずれも、一人一人の市民が、人間的尊厳を保ち、魂の自立を守り、市民的自由を最大限に享受できるような社会を安定的に維持するために必要不可欠なものである』と、述べておられます。地域医療構想は、国の制度の中で進められていますが、本来の目的は、地域住民に質の高い医療を適切に提供することです。冷静に自院の経営課題を考えることも大切ですが、より良い地域づくりのために、構想の策定にあたって、住民および患者の側に立って医療提供体制を考える姿勢を忘れないように、地域医療調整会議に臨むことが求められます。人手不足、働き方改革、医師偏在の解消など課題は多くありますが、地域医療構想と地域包括ケア計画を連動させながら、病気や障がいがあっても住み慣れた地域で住み続けたいと願う方々のために、地域の拠点病院の役割は益々重要です。引き続き、皆様のご助言とご協力をよろしくお願い申し上げます。

看護師さんのページ No.52

常に深化・進化し続けるナースでありたい

島根県看護協会参与・ナースセンター長
春日　順子

明けましておめでとうございます。

このたび、島根で頑張っている地域医療・看護を支えるナース達へ「エールを送りたい」との気持ちで執筆させていただきました。

私が看護師を目指したのは、高校１年生のとき、元気だった父が急死したことがきっかけです。一緒に暮らしていながら何もできなかったことが情けなく、病気について学びたいとの強い思いからでした。

そして、看護師となった私の看護の原点は、１９７２年に就職した島根県立中央病院で初めて配属された病棟で、脳出血手術後の意識障害による寝たきり患者さんの看護ケアからの学びでした。患者さんの奥様が農業の傍ら毎日夜遅く洗濯物をもって見舞われていらっしゃいましたが、半年以上経過し回復の兆しのないまま経管栄養で在宅療養となりました。患者さんの退院後、退院指導は適切であったか等を確認するため、ご自宅を訪問させていただきました。奥様は暖房のない部屋を暖めようと火鉢に炭をおこし、加湿のためやかんを置き、患者さんのことを気にかけて思いやる様子に家族の温もりを感じた瞬間でした。当時、機能回復が望めず家族の介護負担を考えつつ在宅に移行したケースが４例あり、入院診療から在宅医療への移行について研究する機会をいただき

ました。

あれから40年以上経ち、社会は少子化の進展で労働力が不足し、医療は高齢化の進展により「病院完結」から「在宅」へと大きく舵を切り、多職種連携による地域包括ケアの推進が図られています。

私が所属する公益社団法人日本看護協会では、２０２５年を見据えた社会保障制度改革の動きが進む中、看護に関する今後の展望について、２０１５年、看護活動の今後の方向性を示す「看護の将来ビジョン」を策定しました。少子・超高齢・多死社会における保健医療福祉体制の再構築は、看護職が立ち向かっていくべき大きな課題であり、変革の時となるこれからの10年、看護、そして看護職はどうあるべきか、「いのち・くらし・尊厳をまもり支える看護」を２０２５年に向けた看護の挑戦として示しています。

現在、看護の現場では専門看護師・認定看護師に加え、新たに誕生した特定行為のできる看護師が多職種連携の中で活躍しています。医療は、ＡＩやゲノム解析など今後ますます高度・専門化するでしょう。本年、２０１９年は、「平成」が新元号へ変わるなど変化の年になるように感じます。

私は、ナースとして、変化に合わせて常に深化・進化し続けていきたいという思いをもって看護に取り組んできました。

今後も医療・看護を取り巻く環境は変化していくと思いますが、ナースの皆さんには、看護者として自律し看護の３要素「知識・技術・態度」を深めるよう今後も挑戦し続けて欲しいと願います。人々の尊厳を保持し、健康で幸福でありたいという普遍的ニーズに応えるために。

研修医のページ No.55

島根大学医学部附属病院
小児科医　秋好　瑞希

皆様こんにちは。島根大学医学部附属病院で小児科医をしております秋好瑞希と申します。島根県益田市の出身で島根大学を卒業しました。その後は益田赤十字病院で初期研修医として2年間勤務し、今に至っております。今回、この『島根の地域医療』の「研修医のページ」を執筆するにあたり、私が医師となった後、どのような経緯をたどり、現在に至ったかについて、書き綴っていこうと思います。

まずは研修医時代を振り返ってみます。先にも述べましたが、私は益田赤十字病院で初期研修を行いました。出身地で医師としてのスタートを切れたことは、私にとってとても良い経験となりました。自分が生まれ育った街がどのような医療状況にあり、そのなかでどのような医師が必要とされているかを、身をもって体験することができたからです。2年間を通じて、上級医の先生方をはじめ、多くの方々にご指導いただき、医師としての基本的な知識や技術だけでなく、一社会人としての心構えなど、多くのことを学ばせていただきました。

そして初期研修終了後は、専攻医としての後期研修が始まります。初期研修医にとって専攻する診療科の選択は、その後の医師人生を決める大きな分岐点であり、悩みの種になることもしばしばあります。私自身も大いに悩みました。いろいろな診療科に興味があり、決め手を欠いた状態が続いていました。そんな時に思い出したのが、医師を志したきっかけでした。幼少期は病弱で、よく入院をしていました。その経験があったからこそ、私は医師を志すようになりました。私の原点ともいえる経験をもとに、小児科を専攻することに決めました。

4月から小児科医としての生活がスタートしました。初期研修の時とまた環境ががらりと変わったことで、今までの研修での自分自身の反省点も見えてくるようになりました。これを機会に医師としてさらに成長し、こどもたちやそのご家族にとって、より良い医療を提供できるよう日々精進してまいります。

安来市・地域医療を守る交流会

安来市役所健康福祉部
いきいき健康課　安達　真由美

安来市は、人口３８，９６９人、高齢化率35・7％（平成30年10月末現在）で、高齢化が進んでいます。今後在宅療養を必要とする方も増えていく中、これからの地域医療を担っていく医師の世代交代も顕在化しつつあります。安来市においても、医師、看護師の充足率は十分とは言えません。

安来市いきいき健康課では、これからも市民が住み慣れた地域で安心して医療を受け、生活していくために、安来市医療従事者育成・確保対策として奨学金貸与事業や地域医療教育推進事業、地域医療を守る交流会事業に取り組んでいます。地域医療教育推進事業では、市内の小中学校を対象として県のご支援をいただき、医療に関する図書購入や医師、看護師等による児童・生徒に向けての講話を実施しています。こうした取り組みが医療職に対する興味・関心を高めるきっかけになっていると考えます。

8月には、昨年に引き続き地域医療を守る交流会を開催しました。昼の部では、市内の高校生とその保護者及び一般市民を対象とし、市内の診療所医師と訪問看護ステーションの看護師による講演会と、島根大学地域枠出身の若手医師（以下、地域枠医師）を囲んでの座談会を行いました。特に高校生

にとって地域枠医師は同じ安来市出身で年齢も近いということもあり、親近感を感じていただけたように思います。座談会では、医師になるきっかけや、実際の1日の勤務についてお話していただきました。参加された高校生からは「世代の近いお医者さんの話が聞けて良かった」、保護者からは「これまで、子どもは都会の病院で働いた方が良いと思っていたが、地域を支え、安来で働くことを視野にいれても良いと思った」と嬉しい感想をいただきました。その他、「専門資格を持つことを子や孫に伝えたい」と老若男女たくさんの方々に安来市の地域医療について知っていただく貴重な機会となりました。

夜の部では、地域枠医師や市の奨学金貸与事業を活用された方、市内の医療関係者の方々にご出席をいただき、交流会を行いました。交流会では、各医療機関の代表の方より地域医療への想いややりがい、魅力についてお話いただきました。改めて安来市の医療機関と地域との繋がりの強さや温かさ、絆といったものを感じ、それを参加者全員で共有することができたと感じています。会の最後には、島根大学医学部地域医療支援学講座の谷口栄作教授より「このような機会を通じ、地域の医療を皆で守っていこうという雰囲気が大切であり、またこうした会を続けていくことが重要である」というメッセージをいただきました。

安来市は、今後も医療の道を目指す方々の地域での活躍を期待し、今まで以上に地域の魅力を発信し、地域との懸け橋となれるように努めていきたいと考えています。

平成30年度 島根県臨床研修指導医講習会

10月26日（金）と27日（土）の2日間、島根大学医学部附属病院ゼブラ棟において、島根県臨床研修指導医講習会を開催しました。

この講習会は、研修医の指導を行う指導医を養成することを目的として、厚生労働省の開催指針に基づいて行われるもので、昨年度からしまね地域医療支援センターが島根県からの委託を受けて実施しています。

今回は、県内の臨床研修病院とその協力施設から概ね卒後7年目以上の医師38名が参加されました。

最初に、参加者同士で積み木式自己紹介を行った後、研修目標、方略、評価のグループワークや、フィードバック・ロールプレイ、メンタルヘルス、プロフェッショナリズムなど、指導医に必要なスキルを学びました。

レクチャー

グループワーク

修了証書授与式

最後には、参加者一人一人から、指導医として実行したいことや心がけたいことを発表していただきました。16時間という長時間の受講は大変だったと思いますが、グループワークを通じて参加者同士の横の繋がりや様々な意見交換ができ、充実した様子でした。

また講師は、昨年から島根大学医学部附属病院卒後臨床研修センター長の鬼形和道先生にチーフタスクフォースを務めていただき、島根大学、松江赤十字病院、松江市立病院、六日市病院の7名の先生にタスクフォースとして熱心に指導していただきました。

今年度の島根県内の初期研修マッチング者は64名で昨年度の61名を上回って過去最高となりました。近年県内で初期研修を行う研修医は増えてきています。受講された先生方が今後指導医として活躍されることを期待しています。

【しまね地域医療支援センター】

情報発信

前号でお知らせしました民間Webサイトに開設した島根県の特集ページに、このたび「赤ひげバンク」の紹介動画が掲載されました。「赤ひげバンク」の取組みのほか、観光地や文化なども幅広く紹介する内容となっていますので、ぜひご覧ください！

DOCTORCAST × しまねの医師確保対策

動画はこちらからご覧になれます！

赤ひげバンク

島根の医療機関で働いてくださる方を募集しています！

友人・知人に島根県での勤務を希望される医師がおられましたら、是非ご紹介ください。

赤ひげバンクにご登録いただいた方には、医療機関の情報等を提供し、U・Iターンを支援します。

※ご登録者の方で、住所等に変更があった場合は、メールでお知らせ願います。

島根県健康福祉部医療政策課 医師確保対策室
TEL:0852-22-6683
E-Mail:akahigebank@pref.shimane.lg.jp